第４回三木市小中一貫教育推進協議会　議事録（要旨）

日　　時：令和４年 10 月 19 日(水）午後７時～午後８時 50 分
場　　所：市役所５階　大会議室
出　席　者：

構　成　員	山下　晃一	神戸大学大学院	教授
	安藤　福光	兵庫教育大学大学院	准教授
	又吉　健二	三木市区長協議会連合会	
	密　祐浩	三木市区長協議会連合会	
	井上　澄子	三木市区長協議会連合会	
	吉川　敬二	三木市連合ＰＴＡ	
	小紫　達矢	三木小学校　校長	
	長谷川　珠里	吉川小学校　校長	
	藤井　克成	吉川中学校　校長	
	坂田　直裕	別所中学校　校長	
事　務　局	本岡忠明教育総務部長、横田浩一教育振興部長、荒田知宏教育施設課長、鍋島健一学校再編室長、武内克朗学校再編室副室長、河賀健太郎学校再編室主査		

１　開会

委員長あいさつ

（委員長）

第４回小中一貫教育推進協議会を開催する。

朝夕冷え込んできている今日この頃ではあるが、今回も、三木の子ども達のために熱い議論をお願いする。

２　議事（１）「子どもにつけたい力」について

（委員長）

今回は３つの議事について議論を行う予定である。まずは、１つ目の「子どもにつけたい力」について、事務局から説明をお願いする。

（事務局）

資料２「子どもにつけたい力」をご覧願う。第２、３回の会議での皆様のご意見を短い言葉でまとめている。

基本的にはこれをもとに協議を進めていきたいと考えている。修正があればご指摘いただきたい。

（委員長）

それでは、資料２に目を通していただきたい。ご指摘はないか。

（事務局）
　発言された順で表記しているが、意見書になるときには、意見を寄せたり、グループ分けをしたり、順番を変えたりすることも考えられる。

（委員長）
　７つの項目になっているが、もう少しまとめてもよいと思うし、三木市のめざす学力の姿等との関係も意識してまとめてもらってもよいと思う。
　皆様、ご意見いかがか。

　【意見なし】

（委員長）
　それでは、子ども達につけたい力を考えていく上で、以前からうかがっている実践推進校の報告を、取組状況も含め、お聞かせ願う。まずは「別所中学校」よりお願いする。

（委員）
　別所中学校についてお話させていただく。教職員・児童生徒達の意識を、今までの小学校６年間と中学校３年間という区切りのあるものではなく、９年間を見通してという意識に変えていくことが大切だと考えている。

　交流を進めながら意識を変えていくことをめざし、まずは教職員の交流、それから児童生徒の交流を大事にしながら進めているところである。

　教職員の交流としては、９年間を見通したカリキュラム作成を通じた小・中学校教職員研修から着手した。カリキュラムづくりの過程で小・中学校の教職員が意見を出し合い進めていくことが大きなねらいである。

　夏休みには、小・中学校の教科書を持ち寄り、教科ごとに小学校・中学校の教職員が入り混じって意見を出し合う合同研修会を開催した。９年間を通して学習していく内容がどのようにつながっているのかということ、連続性・発展性を意識しながらカリキュラムづくりに取り組んでいる。

　児童生徒の交流としては、１学期に開催された小学１年生から６年生までを再編成した縦割り班での活動に、中学１年生が参加した。絵本の読み聞かせや小学６年生の企画運営のサポートをしていくような活動を行った。目を配り、気を配り活動する姿が見られた。

中学１年生には、小学生の頑張りを見つけることと同時に、自分や仲間、周りにいる人の良いところに気づくことをめざした。
この活動からも主体性・思考力をもって関わっていくことが、優しさや思いやりの育成につながっていくと感じた。

今後の予定として、教職員の交流については、作成したカリキュラムの活用方法を考えていきたいと考えている。

児童生徒の交流については、11 月２日（水）に開催する中学校の文化祭に小学校６年生を招待し、給食等も含めて１日を中学校で過ごす交流を考えている。
中学１～３年生がステージで発表する姿を通して、これから始まる自分たちの中学校生活の具体的なイメージにつながり、見通しを持って中学校生活を送ることにつながっていくと、期待している。

また中学校の校則を見直す際も、生徒会と児童会との交流ができればと考えているところである。

これらのような教職員の交流や児童生徒の交流を通して、９年間を見通す意識の改革につながるよう進めているところである。

（委員長）
次に、「吉川小学校」の報告を、取組状況も含め、お聞かせ願う。

（委員）
はじめに、吉川小学校は吉川町内の４つの小学校を統合し、新しく開校した小学校である。令和３年度に３小学校、令和４年度にもう１つの小学校とも統合し吉川町内は今年度から１中１小となった。

まず、４月に小・中中学校の管理職と担当者で幹事会を開催し１年間の予定を立てた。
年間を通じて推進委員会を３回、合同研修会を５回実施するための日程調整や取組内容を話し合った。

中学校は放課後に部活動があるので、合同で研修会を行うためには日時を年度当初に決めておく事が大切だと思う。

夏季合同研修会では、安藤先生を講師とし、「小中一貫教育実践推進校の１年目の歩み」というテーマで講演いただいた。小学校に来たことがないという中学校の教職員もいたので、会場は吉川小学校で行った。

９月に実施に合同研修会では、全国学力・学習状況調査の結果や考察を小・中学校で共有し、連携した指導を行うために情報共有を図った。
また教科部会では９年間のカリキュラムづくりに取り組んでいる。

学校行事である運動会・体育大会の小中連携も進めている。昨年度末から合同実施に向けた計画を進めようとしていたが、新型コロナウィルスの感染状況等も鑑みて合同実施は見送ったところである。
合同で学校行事を行えば、小・中学校の教職員がより密に連携する必要が出てくること、児童生徒の相互交流も行えることをねらいとしている。

今年度は、吉川中において、同日午前に小学校の運動会をし、午後から中学校の体育大会を実施することとした。同じ日に、同じ場所で開催することで実質的な交流ができると考える。

教職員交流としては、教科ごとに授業を通じて交流を進めるために教職員が小学校と中学校を行き来している。今後は授業交流をする教科を増やしていきたい。

10 月の推進委員会では小学校で考えた「めざす 12 歳の姿」と中学校で考えた「めざす 15 歳の姿」のすり合わせを終え、吉川中学校区における「めざす 15 歳の姿」について確認していった。

主体性については、「何事にも前向きに挑戦し、自分で考えて行動できる児童」をめざす 12 歳の姿とし、「自ら課題を定め、見通しをもって自分を高める生徒」をめざす 15 歳の姿とした。
会の冒頭にも説明のあった、前回の本協議会で委員の皆さんから出された「子どもにつけたい力」と重ねてみると、主体性、思考力、生き抜く力ともつながっていると考えられる。

協働性については、「対話しながら、よりよい方向性を見出そうとする児童」をめざす 12 歳の姿とし、「自他を認め合いながら、よりよい方向性を見出そうとする生徒」をめざす 15 歳の姿とした。
子どもにつけたい力との関連については、優しさ、思いやり、コミュニケーション力につながっていると考えられる。

創造力については、「目標や夢を持ち、先を見通しながら粘り強く努力する児童」をめざす 12 歳の姿とし、「柔軟な発想で、変化をとらえ新たな可能性を広げる生徒」をめざす 15 歳の姿とした。

子どもに付けたい力との関連については、たくましさ、生き抜く力・判断力等につながっていると考えられる。

今後も思い切ってやることを恐れずに、教職員や児童生徒の交流、小中一貫教育の推進を図っていきたいと考えている。

（委員長）
吉川中学校として、追加する点はいかがか。

（委員）
特にこの半年、教職員同士の交流は随分進んだ。
中学校の教科担当が小学校に連絡する際に、小学校での各教科の窓口となる先生を作っていただく等の体制が整っていたことが、大きな要因になったと考える。

カリキュラムづくりでは、中学校の分野ごとに色分けしたり、矢印でつないだりしながら、つながりを把握しようとしている。
例えば、社会科では、都道府県の学習を小・中学校で連続して学習できるように、単元を入れ替えたりする等の工夫はできないか、との話も出ていた。教科における教員の交流も深まってきている。

児童生徒の交流の機会の創出を考えている。
例えば、授業体験や部活動体験ができる機会を複数回計画することや、小学校から中学校に来てもらい複数回の出前授業を計画していくことを考えている。
スマートフォンの安全教室を小学校６年生と中学生が一緒に行い、その後中学校の教室で小学校の授業をしてもらう等も考えている。
６年児童は、中学校校舎の雰囲気を味わうことができ、中学校教員は実際の小学校教諭の授業を参観しに行きやすい環境を作り出すことができる。

交流を通して、より小学校教員と中学校教員とが気兼ねなく連絡を取り合える関係になればよいと考える。
体育会に向けての合同練習が出来なかったのは残念だったが、同じ日に、同じ場所で開催する今年度の運動会で、児童生徒が、それぞれの運動会をどんな表情で見て、どんな感想を持ってくれるのか楽しみでもある。

（委員長）
両校とも、それぞれによく練られた形での素晴らしい取組が進んでいる。
自然な形で上の学年と下の学年が接することで、子ども同士での学び合いが

進んだり、今までとは違う気持ちの持ち方をしたりすると考えられる。
　他の委員、質問等いかがか。

（委員）
　別所・吉川ともに着実に進んでいるなという感じがした。カリキュラムづくりの中で教職員の方の困難な事や、取り組みやすかった事などがあればお聞かせ願う。

（委員）
　今までは、6年生の終わりと中学校1年の始まり部分の接続部分だけに焦点をあてた小中連携になっていた。
　今回は9年間を見通しながらカリキュラムを考えたところが非常に大きかったと思う。

　小中合同での検証は1日だけの設定で、この日にはカリキュラムづくりの方向性だけを確認した。そのあとは、teams等で連絡を取りながら、小・中学校互いに進めていたので、教職員の交流という意味でも非常にメリットがあった。

（委員）
　一般的に中学校の教員は国語科担当であれば、1、2、3年と持ち上がる中で実践的に系統性を心得ることができる。
　小学校の教員は、国語も算数も理科も授業する。複数教科を授業するので、6年間のつながりも、ともすれば途切れてしまいがちであることが課題の一つであると、私は思う。

　今回9年間を見通すことで小学校も、あらためて1～6年生までのつながりを再確認できた。
　また、市教委から小学校には中学校の教科書を、中学校には小学校の教科書を揃えてもらっている。小学校1年から中学校3年までの教科書が目の前にあり、学びの連続性について学び始めようとしているところである。
　今年1年で全てできるということではないが、やろうとしているところだ。

（委員）
　吉川で全国学力・学習状況調査の結果の考察をされたということであったが、教員からどのような意見が出たのか、可能な範囲でお聞かせ願う。

（委員）
　全国学力・学習状況調査の結果をベースにスタートしたが、日頃授業をしている中で、この子たちにはもっとこんな力をつけてやりたいという教科面での

課題が出てきた。その中で、定着の弱い部分や単元のつながりを考え、系統性を見つけていこうという流れになっていった。

今回、小・中学校の教員交流を進める中で、中学校教員同士も学習について交流する機会となった。
小・中学校の教員として自分が何を大切にしているのか、それぞれの授業の中で何を大切にしているのか、について交流をしたグループもあった。

（委員）
教師の皆さんが一生懸命に取り組まれているのがよくわかった。これからも教師というプロの方々によいものを作っていただきたいと願う。

議事（２）「集約する学校数」について
（委員長）
前回では、「現在の６つの中学校区の単位で、これまでの小中一貫教育の実践をいかしながら、小中一貫教育（ソフト面）を推進しているので、その延長線上に施設一体型の学校への意向を見据えるのが現実的である」との意見があった。

今日の意見にもあったように、今、6 中学校でしっかりと小中一貫教育に取り組み始めた。今の段階で学校をなくしていくというのは、もったいない。教師というプロの方々の取組を尊重して、現在の校区で考え、これからの三木の子ども達のためにつなげていただくというのは大切な視点である。

現状の話でいくと、平成 30 年度段階のプランに特にこだわらなくてもよいという理解でよろしいか。

（事務局）
もともと統合を検討する上でのイメージであり、その先を見据えて、平成 30 年度の段階において出したものである。現状を見極め、新たに検討していく必要があると認識している。

（委員長）
例えばタブレットの急速な普及のように、状況も変化していくものであり、状況に応じて我々も考えていかないといけないと思った。
逆に言うと、我々も絶対の数字にする必要はないが、５校のイメージにこだわる必要はなく、一旦６校を想定して考えていくという形でよいか。どうしても５校でないとといけないという方、おられるか。

【意見なし】

（委員長）
中身の方を大切にし、一旦我々が数として想定するのは６校ということで考え、話を進めていく。
平成 30 年の段階では５つの地域という形だったが、現状を鑑みた時に、我々としては６つの地域で進めていくという形で一旦考えていければと思う。

数年後に次の担当の方が着手する際、今のように、状況も変わっていることが予想されるので、慎重に書いておく必要があると考える。副委員長はどうお考えか。

（副委員長）
２つの学校に関わらせていただいているが、両校とも非常に先生方が熱心に、この中学校区の小中一貫教育をどうしようかと考えておられる。

数年前には５校という案もあったようだが、私もとりあえずは、現中学校区で議論を進めてよいと思う。
この辺りは、委員の皆様もそうお考えだと思われる。

ただ先ほど委員長も言われたが、5 や 6 という数字だけが独り歩きしていく。数字だけ取り出して言われてしまう危険性がある。統廃合の問題だけではなく、全国学力・学習状況調査の結果も、点数だけが独り歩きしてしまっている点も否めない。

将来検討する時に、次の人たちが議論していく時に、足かせにならないように、その時の状況に応じて、学校数等について柔軟に対応していけるように、配慮や考慮すべき要件、事項、視点というのをこの協議会で、委員の皆様からご意見いただき、出しておく必要があると思う。

令和４年度の話ではなく、令和 10 年度、令和 15 年度になった時、次に担当する人たちが議論しやすいような整備をしておくことが、今の私たちに必要なことだと考える。

（委員長）
平成 30 年度の５も独り歩きしてしまったのではないか、と想像する。
一旦５や６にするにしても、子どもの実態や地域の様子、未来の姿等、そこに至るまでに何に注意していくのかが大切である。

学校数を打ち出すことよりも、委員の皆様と考えた「子どもにつけたい力」や「子どもの数に注意しながら施設一体型の学校への移行をめざしましょう」というように、意見書に書く方がよいと考える。

現在の学校現場の様子や先生方の取組を受け止め、仮に６として議論を進める。
次の方々へバトンタッチするために、我々の懸案をもとに次の手立てへの視点となるようなことを、考えていただきたい。

我々はスタート地点の地ならしをする。次の方々がスムーズに走り出せるように、施設一体型の学校に移行していくための注意書きが、今回の意見書だと考える。

私が今、考えるのは児童生徒数である。
今の出生数から、今後児童生徒数がどのように変わっていくのか５～６年先のことは分かるがそれ以降の事は分からない。

この５～６年先の子どもの人口予測はできるが、その間に、全部の学校が建つとは思えない。したがって、児童生徒数の推移に注意を払っていく必要がある。

例えば、神戸市においても、ちょっとした宅地の開発等においても、児童生徒数に大きく作用してくることもあった。

三木市においても、地域の開発発展状況、それに伴う人口の変化、子育て世帯の変化も含めて、児童生徒数には注視し、施設一体型の学校への移行を考えていく必要がある。

（委員）
先ほどお伝えしたように、吉川町では、４つの小学校区に分かれていたのが１つになって、あらためて学校が地域に支えられていることを実感している。

学校が閉校し、今まで行っていたボランティアは一旦辞めようと思っていたが、やっぱり子ども達のために力になれることがあれば協力する、という地域の方もおられる。４校分の力強さになったように感じる。

地域がどのような学校になってほしいかを知っておく必要があるのではなか。地域・地区の小中一貫教育への思い等も考え合わせながら、今後の構想を積み上げていければよいと思う。

（委員長）
本協議会でも地域の方々にたくさん参加していただいている。学校の在り方は地域の在り方と結びついている。
地域からの期待度も大きく、地域の意向も含めた、広く学校と地域の関係がどうなってきているのか、時々によって変わってきているかもしれない。

三木市においては、コミュニティ・スクールの導入についてはどのように考えているのか。

（事務局）
今、まさに進めているところで、令和５年度から中学校に順次着手していこうと思う。令和５年度に２校、その後順次２校ずつ導入したいと考えている。

（委員長）
コミュニティ・スクールとは、今までよりも一歩踏み込んで、学校と地域が一体になって子ども達を育てていく仕組みのことである。日本全体の学校への導入が進められている。

コミュニティ・スクールは学校と地域の基盤になっていき、地域によっては中学校で導入し、そこに小学校も併せ、中学校区を一つのまとまりとして考えるところもある。
まさに小中一貫教育に重要な影響を与えていくと考えられる。

どうなっていくかを観察するというよりは、積極的に働きかけていくべきことだと考える。

（事務局）
実践推進校の吉川と別所については、１小１中の関係である。まず、令和５年度のコミュニティ・スクールの立ち上げ予定の吉川では、小学校と中学校との合同型という形で考えている。

次に計画している別所地区についても、１小１中であるので、合同型という形で進めていこうと準備しているところである。

（委員長）
次へバトンタッチしていく時に、このようなことに注意した方がよいよと、申し送りしていくことはないか。

（委員）
吉川中学校・別所中学校においては、実践推進校ということで小中一貫教育の取組をスタートしている。市内全６中学校区においても、中学校校区ごとでソフト面を進めている。

ハード面の施設一体型一貫校が小中一貫教育に効果的だが、一足飛びに到達する訳ではない。まずは中学校区ごとにソフト面を進め、その先に施設一体型への移行を考える流れが大切である。

それが５校になるのか６校になるのかは、これからの流れ、児童生徒数を見極めながら考えていくことが大事になってくる。

まずはどこか分からないが、三木市内に最初にできた施設一体型一貫校をモデル校として、現在進めているソフト面をより効率的に進めていくためのハード面の在り方を検討していく流れがよいのではないか。

（委員長）
三木の中で小中一貫教育が始まっているところで、それをまず大事にしていき、その取組状況の推移、進捗を見定めていく。
そして、教育内容に注意しながら施設整備に着手していく。準備が整っていないのに、いきなり施設整備していくのは難しい。

もう一つは、全校を一度には進められない。もし建ったとしても、課題点や問題点が建った後から大きくなっていくかもしれない。
副委員長、全国的にはどんな感じで、小中一貫校を広めているのかご存じか。

（副委員長）
まず、モデル校をつくり、成果検証した上で、広げていくというパターンが多いと思う。

（委員）
口吉川に在住している１～６歳は 20 人ほどしかいない。現在口吉川小学校全校生で 60 人ですから、三分の一になってゆく。
20 人しかいない学校に子どもは行かせたくないので附属小に行かせる、となれば、20 人以下の小学校になってしまう。例えば、５、６人しかいない小学校、５、６年しか持たない小学校、児童のいない小学校になってしまうかもしれない。

また進学する 400 人規模の中学校へのいわゆる中１ギャップが計り知れな

い。いきなり大規模になるというギャップを感じさせたくない。僅かな子ども達だが、平等に、ある程度の規模で勉強させてあげたいと願う。

市として、学校を建てることについて、目標を持ってこれだけ準備を重ね、丁寧に進んでいくのはよいだろうが、モデル校の様子を見てゆっくり次の学校を考えていたら間に合わない。

子どものいない町は滅びていくので、町づくりも全体の事を考えていかないといけないと痛切に思う。ゆっくり慎重に考えていくのはよいことだが、小さなところは間に合わない。

集団に埋もれてしまうのではなく、人数の多いところに行っても一人一人の個性を伸ばしていけるような豊かな教育をめざしていただけるのなら、大規模の学校で勉強させてあげたい。

確かにモデルも大事である。吉川と別所に１小１中という、適した環境があるので、進めていただいたらよい。しかし、小規模の学校は、今まさに逼迫しているので、これも考えていただきたい。

（委員長）
児童生徒数の問題と地域の問題、それに先ほど申したように全校を一度に進める事は難しいので、どこかモデル校で成果検証した上で、進めていくのが良いのではないか。
そこからの波及効果をきっちり検証していくことにはなるのだろうが、同時に過小になりすぎて教育が成立し難いというような場合が生じた時には、早急に手立てを講じられるような、急を要するような状況が生じた場合には、別途検討するということも当然考えていく必要がある。

先ほどの 20 人が、そのまま残ってくれたらまだしも、1 歳から 6 歳で 20 人、１学年については３、４人。この３、４人が一気に別の学校に行くという事も有り得ることである。そうした時にどう考えればいいのかという問題が残ってくる。

（委員）
星陽中学校の時も、口吉川小学校卒業の子ども達が 10 人いた。しかし、星陽中学校に行ったのは３人で、７人が附属へ行かれた。
元々の少人数がさらに少人数になり、部活動数も制限された。いろいろなスポーツがやりたい場合にも大規模な学校へ行かせたいと思う。
後６年で 20 人になるので、10 人になるぐらいだと思ってもおかしくない。

本当に逼迫している。

（委員）
　児童生徒数から施設一体型の小中一貫校のモデルを考えてみた。
　高等学校の再編の話があるが、近隣の高校くらいの規模で学校用地が出てくるとすると、そこで施設一体型の小中一貫校学校が運営できると良いのではないか。

　今後、高校の統廃合については県教委が発表するので分からないが、地域の方にもご協力いただき、十分な情報交換から始めていくとコミュニティ・スクールもスムーズに進むと思う。

（委員長）
　施設整備も環境や状況の変化をいち早くキャッチし、状況を見ながら、施設整備の方向性を検討する。高校についてもいずれの段階かでは分かることになる。

　モデル校をつくって検証し、そこだけで終わってしまう事が決してないように、慎重かつ急いで整備を進める必要がある。

　全体動向を見据えながら、三木全体で進め、チーム三木で、地域全体、三木市全体の状況を見定めながら、先送りするところは先送りしながら整備を進めることが大切である。

　少し気になっているのは、学校は変わっていくところもあるということだ。
　私自身が、通信制の高校の研究をしており、私立の広域性の通信制高校で学校の在り方について考えてみたことである。

　タブレットが導入され、授業がオンラインで行われる状況になった。近未来の話になるかもしれないが、小学生や中学生も午前中だけの登校で、午後は行かなくてもよい、通いたい学校が週替わり月替わりで選択できるようになるかもしれない。

　そういう学校施設の変化、学校自体がどういう役割を担うのか、が変わってくるかもしれない。

　学校施設の在り方や社会的なニーズの変化も、当然視野に入れていく必要があると思う。

三木市だけでなく、今、日本全国、本当に切羽詰まってきているところである。だからこそ、皆さんと知恵と工夫を出し合わないといけない。

議事（３）「吉川地域の学校の在り方」について
（委員長）
市の方向性でもあるように、吉川から始めるという方向性で考えていって良いか。良ければ、モデル校として検討する。
吉川地区は一番児童生徒数が少ないという事で、ある意味でのやりやすさもあるかもしれない。また、今日の報告であったように実践推進校としても実践を積み重ねてきている吉川からが、適しているのではないか。

（副委員長）
たしかに吉川は小規模になっているので、総合教育会議で言われたように、吉川の小中一貫校で、教育を充実させないといけないと思う。

（委員長）
少なくとも、吉川から着手して、早急に待ったなしの状態のようだ。
三木市全体で考えた場合、非常にお困りの地域もあり、そこの地域への手立てを早く打つためにも、まずモデル校を早めにつくらないといけない。他の地域も早く考えていく必要がある。

これまでのいきさつからして、学校単位で考え、吉川ということになる。
特にご異議が無ければ、我々の意見としては、吉川からの着手。
実際に実施計画を立てる際への注意点も書き入れる必要がある、と考える。いかがか。

【異議なし】

（委員長）
波及効果も考えて、モデル校への要望も含め、懸念事項、注意をしてほしいという事について触れておきたい。

じっくりとやっていただく必要もあるが、他地域へも早く着手できるように出来る限り早い可及的速やかな形でお願いする。先生方を急がせるのは心もとないところであるので、これは教育委員会に対するお願いになると思われる。

首長部局とも綿密に協議・交渉していただき、出来る限り他の地域の教育環境も高めていくという観点から、小中一貫教育の全市的な普及を考える必要がある。

児童数・生徒数についてもきちんと見定め、もしかしたらこれをきっかけに居住者が増えるという事もあるかもしれないので、人口推移にご注意していただきたい。

（委員）
明石市は中学校にコミュニティ・センターあるいは公民館的な施設等、地域の方が気軽に集まることができる施設・スペースがあった。

吉川はそういう事をしやすいのではないか。公民館の機能を併せ持つような、地域住民の方が気兼ねなく居られるスペースがある学校が出来たらということを常々思っている。

先ほどもコミュニティ・スクールの話があったが、視察でうかがった東条学園にも地域の方が集える、会議ができるスペースがあった。

公民館機能が学校内にあれば、地域の方との連絡も取りやすいのではないか。
もちろん防犯の事もあるが、校内に地域の方が気兼ねなく入ることができる、地域の方から学校を「見える化」するためにも、そのようなスペースのある学校をつくってもらいたい。

そういうことを考えると、ある程度の広さが必要になり、また場所が無ければ校舎を上に積んでいく工夫なども必要となってくる。

（委員長）
いわゆる複合化、合築というものであろう。

学校と公民館のような社会教育の施設が一緒になると、大人の学びの姿を見せることができ、子ども達が自然と地域の方ともふれ合いながら学んでいくことができるであろう。

他の地域においても、施設の複合化が行われている。全国に先進例もあるので、事務局で積極的に情報収集していただきたい。

（委員）
明石のコミュニティ・センターの話を聞き、思い出したのだが、当時の中学校の部活動はほとんど指導員の方がされており、今後の中学校の部活動のことを考えれば、地域の力を得やすい、とてもよいアイデアかと思った。

（委員）
４小学校が統合して、地域の方が学校に来られ、子ども達の様子や授業を見て、「賑やかになったな」と言われる。

先ほど委員が言われたように、閉校した小学校の中には、児童数が減少し、複式学級が複数出たり、完全複式になったりし、少人数になったがゆえに、兵教大附属小学校に通わせる保護者も増えてきていた実態があったかと思う。

小規模の学校は小規模の学校なりのきめ細やかな教育が素晴らしい、と言われる方も多くいる。小規模の学校にはよい面もたくさんあるが、たくましさや生きる力を育むことに限界もある。やはりある程度の人数で、子どもはもまれて育つ必要があると思う。

その点で考えると、小規模すぎると思った時に、また、大規模校よりある程度の規模の学校に通いたいと思った時に、市内の他の地域から通うことができる学校、枠組みをつくっていくのが、よいのではないか。

（委員長）
いわゆる小規模特認校のことである。
状況によるが、人口の状況を見ると、確かに三木市内はアンバランスであり、一定数そう感じておられる方もいるかもしれない。

明石の高丘小学校、中学校では、小中一貫校にしたうえに、小規模特認校制度をとり入れ、明石市内のどこからでも通ってくることができるようにされた。
地域の関係があるかもしれないが、やり方によっては上手くいき、市内の均衡がとれる事があるかもしれない。

口吉川においてもよい形にできるかもしれない。小規模特認校制度についても検討すべきではないか。

学校を取り巻く状況も大きく変化し、ＩＣＴの進歩もあるので、文部科学省も新たな学校の在り方、政策、制度を出してくれるかもしれない。現段階で考えられる制度的な手立てについて、ぜひ広く目配りし、検討していく必要がある。

小規模特認校制度導入も一つの手立てとして、他に新しい制度が生まれていないかということにも目配りし、ぜひモデルケースも豊かなものにしていただきたい。
また、コミュニティ・スクールとの関連もあると思うので、地域との関係も

視野に入れていただきたい。

吉川において、市街化調整区域の見直し等はあるのか。

（委員）
吉川では指定がなく、どこにでも家を建て、新たな転入者を受け入れることが可能である。

（委員長）
地域づくりやまちづくりは、教育についてリンクさせているのか。

（委員）
小学校の校長も、中学校の校長も、吉川町のまちづくり協議会に入っている。
子育て未来部という私の入っている部は、小中一貫教育や学校の在り方についても話し合いを始めている。教育をどうしていくかということをみんなの視点で考えていきましょうという流れがあるので、まちづくりにもリンクすることが可能だと思う。

（委員長）
先生方にも当然頑張っていただかないといけないが、地域・保護者の理解、協力が無ければ絶対上手くいかない。学校だけでなく、地域の方にも学校の在り方についても話し合い、考えてもらいたい。

まちづくりとの関連性をもたせて進めてもらいたい。その部会に軸になっていただき、地域との連携協力関係も育てていってもらえれば、これもよいモデルとなり得る。

（委員）
吉川地域の学校の在り方、モデル校としての進め方に異論は無いように思う。人数は少ないけれど地域として小中一貫校をつくっていく。

以前にも児童生徒数の減少について懸念された時が他地域でもあった。先に意見があった小規模校については喫緊の課題であり、急がなければならない。

三木小学校は２つの中学に進学していくが、三木中学校と三木東中学校の２校が同時に施設一体型小中一貫校となり得るのか？これからの小中一貫校の整備の事を考えると市も財政的に厳しい。

これから施設一体型小中一貫校への移行を進めて行く中で、基準となる事が

あると思うが、吉川地区の次の学校については慎重にした上で急ぐ必要があると思う。

3　まとめ

（委員長）

吉川の次の学校をどうしていくのかを迅速かつ慎重に考えなければならない。そのためにも、今、我々が踏ん張って、小中一貫校への礎をつくっていく必要がある。

もちろん、首長部局との協力なくしてはなし得ないことなので、教育総合会議等を通じ、理解・協力を得ていく必要がある。

そろそろ我々も意見書の内容を考えないといけない時期である。

本来なら５回と言っていたこの協議会だが、今から今日の意見を事務局がまとめ、もう少し練らないと意見書にはなりにくいので、あと１回、２回必要だと考えられる。

委員の皆様には会議の回数が増える形になるかもしれないが、引き続きご協力いただきたい。

何が必要かという具体的な姿が見えてきたように思う。

子どもにつけたい力を柱に、そのために施設整備をどう進めていくか、スタートラインとして、注意点等というような流れの意見書となりそうだ。

次回事務局から、提案していただき、我々として意見を言わしていただく。

4　閉会　副委員長あいさつ

（副委員長）

いろいろ議論がある中でモデル校をどうするか、三木市の多くの課題をどうしていくか、という事を今後私たちが考えていかないといけないと思った。

施設一体型というハード面でのモデル校という面と、教育内容のソフト面のモデル校では意味合いが違うと思う。

吉川と別所で推進されているソフト部分の小中一貫は、よい部分は全市に波及できるところではあるかと思う。今後、この２つのモデル校の取組を継続的に、単年度で、簡単でよいので検証し、それを他の中学校区でもできるものはやっていこう、というのがまず一つだと思われる。

他市でも、小規模校では合同学習をオンライン等でしている。限られた条件・予算の中でも、そういったやり方で子ども達が大人数の中でもまれる経験が少しできるように思う。ある意味でいわゆる中１ギャップに対応できるのではないかと思う。

いずれにしても、成功事例がある中で三木市にとってどれが一番やり易いのかということを含めて、着実な一歩を今後進めていければいいとあらためて認識した。